

山形県連小会報

特集号

発行日 令和4年8月1日
 発行者 山形県連合小学校長会
 江川 久美子
 山形市木の実町12-37
 県教育会館(大手門パルズ)

第76回 山形県連合小学校長会研究協議会 米沢大会がオンラインで開催される



会長あいさつ



来賓あいさつ 加藤淳一教育次長



山形サテライト会場

大会日程

6月10日(金)

- ◇受付
- ◇全体会
 - 1 開会のあいさつ
舟山 潤 実行委員長
 - 2 会長のあいさつ
江川 久美子 会長
 - 3 来賓あいさつ
山形県教育員会教育長
高橋 広樹 様
 - 4 来賓紹介 村上ゆかり 幹事長
 - 5 大会宣言 清野 正敏 研修委員長
 - 6 閉会のあいさつ
江口 俊和 R5年度実行委員長
- ◇研修Ⅰ
講演「子どもたちの幸せな未来を支える地域の魅力」
講師 福田 直樹 氏 (ピアニスト)
黒田 三佳 氏 (里山ソムリエ)
- ◇研修Ⅱ
分科会 (Zoom開催)

講演

演題「子どもたちの幸せな未来を支える地域の魅力」



講師：ピアニスト
福田 直樹 氏



講師：里山ソムリエ
黒田 三佳 氏

第1分科会 【学校経営】 評価・改善

学校課題を解決し、教育の質の向上を図るための学校評価 ～学校経営マネジメントが機能する校長の役割～

川西町立小松小学校 片倉和之

研究協議とまとめ

(趣旨)

町内各学校が抱える課題を明確にし、校長的確かな判断の下、解決のための有効な手立てを講じていくマネジメントサイクルを確立することが重要である。

そのために、学校運営に直結した学校評価について、その実施方法や分析方法、結果の生かし方について、校長の果たすべき役割と指導性について明らかにする。

(研究協議内容)

《グループ協議後、報告された主な内容》

①について

- 年度初めに、学校目標と評価項目について教職員と確認することは必要である。
- 学校教育目標を受けて、子どもにつけたい力を教職員で一緒に考える機会を設けた。そのことが、学校評価項目との連動に繋がった。
- 評価項目もシンプルにして、評価者にとって分かりやすくしていく必要がある。
- 分析については、今年度の重点に対しどう評価されているのかが大事であり、評価回数や経年比較の必要性は学校の実情によって違ってくる。

②について

- ICT化は積極的に進めていく必要がある。
- ICTの有料ソフトの活用例 (PTAの理解)

③について

- CSについて、学校規模・実情によって違うが地域との熟議は必要である。働き方改革の観点も含め、どう熟議を取り入れていくかが校長のマネジメント力にかかっている。
- CSの議題の一つに評価アンケート項目づくりを入れてみるなど、地域と一緒に考えることで、学校課題を共有できる良さがある。アンケート実施主体を学校運営協議会長名で行うのも一つの手ではないか。

(記録 川西町立中郡小学校 平 千秋)

第1分科会に参加して

天童市立天童北部小学校 佐藤 尚子

今回の分科会では、教育の質を高めるための学校評価の在り方や進め方について再考する貴重な機会をいただいた。

中でも「目標と教育活動、評価の一体化」に関する東置賜地区の発表や小グループでの話し合いでは、学校経営の重点と評価項目の整合性をはかるための具体的な実践例を伺うことができた。

特に、評価項目の設定に関して「全職員で育てたい『資質・能力』を検討し、学校評価の項目はもちろん、学級カリキュラムや教職員人事評価の目標もできる限り一本化していく」という実践は、すぐに取り入れて改善していきたいと感じ参考になった。学期末など現在様々な場面で求めている教育反省や評価が一本化されることで、各教育活動のめあてもシンプルに取り組みやすくなる。学級カリキュラムの反省をエクセルに記入すると自動的に教職員人事評価に反映されるようにしている実践も伺い、教職員の働き方改革にもつながると感じた。

また、4月のPTA総会の折など、年度当初に学校評価の項目を保護者に示すという実践は、育てたい子供の姿を共有していくことにもつながるため、本校でも来年度からの実施を検討していきたい。

学校評価をいかに機能させて教育活動を活性化し、教育の質を向上させていくのかは校長のマネジメントにかかっている。学んだことをもとに、今年度改善できるところから早速実践していきたい。

第2分科会

【教育課程】豊かな人間性

豊かな人間性を育む教育課程の推進

～情報社会に適応できる力を育む教育課程編成のための校長の関わり～

山形市立第八小学校 丸山 一裕

研究協議とまとめ

(趣旨)

ICT活用による交流等がコロナ禍にあってこれまで以上に期待される。児童にとってICTの活用は人と人とのつながりを広め、さらに豊かな人間性を育むものと考え、情報社会に適応できる力を育む教育課程の編成と授業のあり方について校長の果たすべき役割や課題を明らかにする。

(研究協議内容)

柱1：ICTも有効に活用した「人とつながる喜び(交流)」を基本にした計画的・系統的な教育課程の編成に向けた校長のリーダーシップと具体的実践

- タブレット活用を校内研究に位置付ける、育成すべき情報活用能力を明確にするなどしながら、目指す子どもの姿や学習内容、計画、系統性等について全職員での共通理解を丁寧に図っていく。
- 姉妹都市や海外県外地域等との交流の場の設定など、コロナ禍で制限のある中でもチャンスと捉えて校長が率先してマネジメントしていく。
- ICT機器の便利さや有効性の気づきを大切に、児童の活動を価値付けたり、実践を紹介して教員間に広げつないたりするような役割を担っていく。

柱2：ICT活用能力向上のための教員研修や環境整備に向けた校長のリーダーシップと具体的実践

- ICT機器使用の中心となる人材育成やICT支援員(指導員)の積極的な活用を推進していく。
- 外部研修での学びや他校での実践例等を、校内に還元していくシステムや、教員同士の情報交換によるOJTの場などの工夫を進めていく。
- 持ち帰り学習へのスムーズな対応に向け、各家庭のWi-Fi環境の支援や情報モラル指導、破損時の対応の明確化等を早急に行っていく。

(記録 山形市立高瀬小学校 細川 直弥)

第2分科会に参加して

酒田市立烏海小学校 齋藤 清志

研究課題「豊かな人間性を育む教育課程」での山形第八小丸山一裕校長先生の発表をお聞きし、その後のグループ協議で意見交流させていただき、大きく2つのことを改めて学ぶことができた。

1つ目は、「教育課程編成に向け、ICT活用にいかに校長が関わり、サポートしていくか。」という点である。研究実践の中で、①発信先の地域とのパイプ役やICT活用時の担任への指導助言・講師の選定、②カリキュラム・マネジメントの視点についての助言、③年間計画に位置づける情報モラル学習の相談など、多くの場面で、校長が積極的に関わりながらICTを有効活用した学習を展開することで「人とつながる喜び」を味わうことができることを学んだ。

2つ目は、「児童のICT活用能力を高めるための研修と環境整備をいかに進めるか。」という点である。意見交流を通して、まずは校長として自分自身のスキル向上とICTの効果的な活用場面の検証が急務であることを実感した。また、校内外の人材を活用した研修の進め方や同地区内での環境整備の必要性、タブレット持ち帰りの諸課題への手立て等、たくさんの情報交流ができたことは、大きな収穫であった。

改めて県連小研究協議会大会宣言の決意表明の中にあるように、「校長自ら研鑽を深め、明確な構想のもとリーダーシップを発揮し学校を経営すること」ができるよう決意を新たにいたしました。研修の機会をご準備・運営いただいた皆様に心より感謝いたします。

第3分科会

【指導育成】研究・研修

ミドルリーダー層の人材育成を目指した
継続可能な研修体制の構築

上山市立中川小学校 小 関 英 嗣

研究協議とまとめ

(趣旨)

市小学校長会で行った教職員アンケートにより、ミドルリーダー層の学校経営参画意識やチーム運営力が各年層と比較して著しく低いことがわかった。本分科会では、校長会としてヤングミドル、ミドルリーダー層の学校経営参画意識の改善、チーム運営力の向上に向けた対策を実践し、その成果と課題を明らかにする。

(研究協議内容)

- ミドルリーダーを対象とした研修会を校長会として行い経営参画意識を高めているが、研修と働き方改革のバランスの取り方は課題である。
- 高い専門性をもつ人材を校長会でピックアップして、研修会等の講師として招聘している。
- キャリアアップシート等を活用して、教員自らが研修を組み立てられるようにすることも大切だ。
- 学校の実情によって人材育成の課題や手立てなどに違いはある。校長が教員に求める具体的な姿を直接伝えたり、意図的に若手に任せたりベテランと組ませたりする工夫とリーダーシップが必要だ。
- 若手が困っていることをアンケートで調べ、それにベテランが答えている学校もある。
- マイスター制度の活用や、校務分掌に拠らないプロジェクトチームを設けて分掌以外の校務にも当たることができる体制を構築している。
- 若手がオンラインなどを活用してテーマを決めて独自に研修会を行っている。また、市町村内の学校間で、同学年や学年の枠を越えた横のつながりを作るための研修会等を行っている。
- ミドルリーダー育成のための研修会に、関係機関や家庭との連携、特別支援教育、クレーム対応など、喫緊の教育課題に関わる内容を意図的に盛り込んでいくことも必要だ。

(記録 上山市立宮川小学校 高橋 徹)

第3分科会に参加して

鶴岡市立黄金小学校 岡崎 秀也

次の時代を担うミドルリーダーの育成は、全国的に急務の課題となっている。また、教職員を育てることは、学校現場の校長の重要な責務といえる。この喫緊の課題解決に向けた上山市校長会の取組は、大変参考になる発表であった。特に県教育委員会の「指標」を基に作成したアンケートの取組やその結果に基づき「充実期」の教職員に焦点化した人材育成の実践は大変興味深いものであった。

その後のブレイクアウトルームでの協議は、「校内での人材育成の取組」「働き方改革を踏まえた研修時間の捻出」「若手教職員の育成に向けた職場環境」等、各校の実態に応じた取組について情報交換を行うことができ大変有意義な時間であった。特に印象に残った内容は、若手教員の増加に伴う校内OJTを如何に推進するか、加えて働き方改革やメンタルヘルスの保持増進等の工夫についてである。それぞれの学校課題に即した工夫のある人材育成の在り方を学ぶことができた時間となった。

今後学校教育を実質的に支え、職場の活性化を進めていくためには、発表題に示された「継続可能な研修体制の構築」が必要となる。「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師の学びの姿の実現においても「個別最適な学び」「協働的な学び」の視点からの人材育成を核として推進していかなければならないと感じた。校長としてのマネジメント力の更なる向上を目指していくことを再認識できた。

第4分科会

【危機管理】 学校安全

自ら判断し行動できる子どもを育てる
安全教育の推進

新庄市立升形小学校 五十嵐

登

研究協議とまとめ

(趣旨)

子どもたち自ら命を守ろうとする力を養うことが求められている。自ら判断し行動できる子どもを育てるという視点で再点検し、校長として果たすべき役割や指導性を明らかにする。

(研究協議内容)

山形金井小・大戸校長：子どもたちの主体的な安全への意識醸成、カリマネの活用（理科、社会、総合学習、道德等）実践は大変参考になった。

長井平野小・菊地校長：本校でも「子ども目線の危険察知・点検が必要」と提案があり、取り組んだ。カリマネ活用の全体構想計画までは難しい。

・ブレイクアウトルーム協議内容の紹介

ルーム1（酒田西荒瀬小 白田校長）：各校の課題は様々で、クマ・カモシカの出没、土砂崩れ、海沿いならでの危機回避等、地域性を生かした安全教育をする上で、校長がカリマネの作成をけん引することは大切だ。自転車の乗り方が改善されず、家庭に返して親の目でルール等を判断させるようにした実践がある。同様に、学校主導の通学班から、家庭同士で協力する自由登校に移行させた。校長は、家庭・地域の教育力にも働きかける視点を持ちたい。

ルーム2（寒河江西根小 原田校長）：ルーム内は、立地条件や環境が違い各校の安全への重点が違う。もはや、学校だけの安全指導ではダメ。地震・豪雨等大災害、コロナ感染などの経験から教育委員会、さらに首長部局危機管理室からの要請や対応依頼を受けて、連携が必要な時代に。

ルーム3（天童成生小 飯田校長）：最上の実践は素晴らしかった。自分事として捉えさせる校長の熱量が必要である。さらに、子ども主体の教科等横断的なカリマネの活用を推進したい。

（記録 鮭川村立鮭川小学校 柿崎 聖）

第4分科会に参加して

朝日町立大谷小学校 渋谷 常浩

新庄市立升形小学校 五十嵐校長先生の実践発表で学んだことは多くあるが、その中でも以下の2つを特に記したい。

- ① 安全教育でも、教科横断的な視点でカリキュラム・マネジメントをすすめることが大事であり、それが職員のベクトルをそろえることにつながる。
- ② 児童主体による安全点検を実施し、職員だけではなく、児童の視点から見て初めて明らかになる内容があること。

さらに、ブレイクアウトルームの話し合いでは、立地条件などの状況により、優先順位をつけながら安全対策に取り組んでいかなければならないこと、決して学校単独で安全教育が進められるものではなく、学校・地域・行政が連携して進められなければならないこと、校長として危機意識を誰よりももちながら学校経営を行っていかなければならないこと、校長は熱量をもって、繰り返し職員・児童に呼びかけなくてはならない事等が話題となった。各校の実情に応じた話題はとても勉強になる内容だった。

最後に、今回、オンライン開催をするにあたって、運営にあたる方々のご苦労はこれまでにないものがあったことと存じます。大変お疲れさまでした。そして、ありがとうございました。

第5分科会

【教育課題】 自立と社会性

子どもの自立と社会性を育む学校経営の推進

尾花沢市立宮沢小学校 竹 埜 理恵子

研究協議とまとめ

(趣旨)

主体的・対話的で深い学びの実現および探究型学習の推進、感染症予防のための新しい生活様式下での学校生活において、自ら考え行動する力、様々な人々とかかわり合う力がこれまで以上に求められている。本分科会では、子どもたちの自立と社会性を育む教育活動を推進するために、特色ある学校経営において校長の果たすべき役割と指導性を明らかにする。

(研究協議内容)

- (1) 教育活動における自立と社会性の比重分析をカリキュラムデザインに反映し実践すること
 - ・授業で自分の考えをもたせ、生徒指導の三機能を生かした授業を設計する。
 - ・子どもたちが気づき、考え、実行することを後押しできるように、教師は、導く、寄り添う、任せること、そして活動を行う子どもたちへの価値付けを行うことが必要である。校長は子どもに対してだけでなく、教員の主体性を大事にし、指導に対する価値付けをして指導意欲を高めることが大切である。
 - ・期待する6年生の姿を見童と教員で共有し、その姿を下級生には自立した姿の模範として示す。
- (2) 校長自らが積極的に地域に出て良好な関係を築くこと
 - ・地域とのつながりを大切にする姿勢を校長自ら教職員に示すとともに、地域学校協働本部の活用や、幼保小の情報共有が必要である。
 - ・保護者や地域の方々への発信方法として、運動会や学習発表会で子どもたちの成長を直接ご覧いただくほか、学校だより、HPの更新、DVDの配布、保護者限定のYouTube配信などで、子どもたちの自立に向かう姿を届けることができる。

(記録 村山市立大久保小学校 富樫 和浩)

第5分科会に参加して

長井市立致芳小学校 鈴木 義明

「子どもの自立と社会性を育むこと」は指導要領や6教振でも大切にしなければならないこととされています。自校においても高める必要性を感じながらもどこから切り込んでいくべきなのか迷っていましたが、ですから今回の北村山地区の研究発表を楽しみにしていました。

非常に共感し、参考になったのは視点の持ち方です。教育活動を縦軸に「自立」横軸に「社会性」をとって分析してみるという点です。確かに「自立」の縦は時間軸とも考えられ、時間とともに自己実現に向かっていきます。「社会性」の横軸は地域の人々との関わりで培われていくものだと思います。

ブレイクアウトルームでの話し合いも楽しいものでした。授業が基盤であり、自分の考えをもつことや実際に決めて認め合うことで自立の力を高めていくことができること、幼保小中の連携がさらに重要になっていくこと、社会性の面ではコミュニティ・スクールの機能を存分に生かして地域社会とのつながりをつくっていき、その姿勢を率先して示していくことが校長の役割だという話になりました。人に興味をもつことを大事に「大人の関わりでのシャワー」を浴びせることで人は心を開いていくという言葉も心に残りました。こんな子どもに育ててほしいという願いをもって、校長自らが行動し、地域とつながっていく姿で示したいと思います。

大変勉強になりました。発表者の皆様、実行委員の皆様へ感謝いたします。